東中野キングス・ガーデン

認知症に対応する水まわりを工夫して長く自立した生活ができるように配慮。

1Fの多機能トイレには、前方ボード、格子状手すり、はね上げ手すり、背もたれなどを設置。オストメイト対応器具も用意されている。

地域に根ざした福祉事業を展開している、キングス・ガーデン東京。
2011年の第1回「介護甲子園」で、練馬キングス・ガーデンが
最優秀賞を受賞するなど、その取り組みは大きく評価されています。
東中野キングス・ガーデンは、2015年3月にオープン。
小規模多機能型居宅介護、グループホーム、地域交流スペースの
3つの事業を運営し、地域とつながるコミュニティとして機能しています。

東中野の街並みに調和しているお洒落な5階建ての建物。

自由に動き、地域の人々と交流しながら「ここに居たい」と思う場所で楽しく生活。

地域に開かれた施設は、1Fが「キングスカフェ」と呼ばれる地域交流スペース、2Fが小規模多機能型居宅介護施設、3・4Fが2ユニットのグループホームとなっています。地域交流スペースは、フローリングにオイル仕上げで、素足でいることがとても心地よい空間。子育て中のママが子どもを連れて集まる「ベビママサロン」など、月に延べ1,300人もの人たちに利用されています。グループホームの入居者も時には1Fで過ごすなど、高齢者と多世代の人たちを自然につなぐ場になっています。

施設長の清水さんが「自分が入りたいと思う施設であるかどうかが重要」と語るように、フロア間の移動は自由で、鍵はかけていません。認知症で細かいことは覚えていなくても、良い感情は記憶に残るもの。「ここに居たい」と思えば、意味もなく出て行かないという考え方です。また、共同生活ではいろいろな人間関係があり、自由に移動できることによる逃げ場の確保も必要だと考えています。

ほとんど毎日、地域のイベントに利用されている。

東中野キングス・ガーデン

- ●竣工年月／2014年12月
- ●所在地／東京都中野区東中野4-2-16
- ●施主／社会福祉法人キングス・ガーデン東京
- ●設計／ケアスタディ株式会社一級建築士事務所
- ●延床面積／1,257.68m²
- ●定員／グループホーム18名
  小規模多機能型居宅介護
  25名（登録定員）

1Fの地域交流スペース「キングスカフェ」には、昔懐かしい雰囲気を感じるレトロな家具なども置かれている。地域の人々は、このスペース専属のコーディネーターに相談もできる。

地域の人々が気軽に立ち寄れるカフェカウンター。コーヒーマシンなどが設置されている。

転倒を過剰に恐れずに歩いて身体の機能を維持。

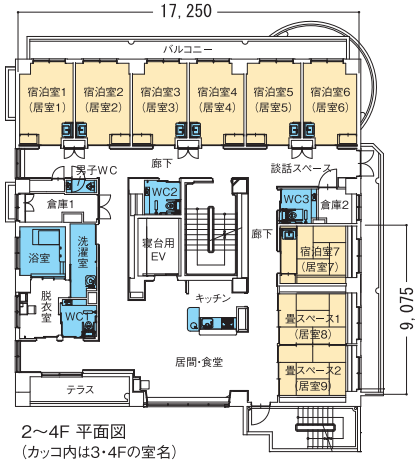
排泄においては、一時的にポータブルトイレを使うことはあっても、基本的にすべての人がトイレを使用しています。

転倒対策としては、転ぶことを前提に考えた衝撃の少ない二重床を採用。転倒を恐れて歩かせないのではなく、歩いて楽しく生活しながら身体機能の維持をはかっています。また、感染対策として冬は加湿を実施。自動水栓は使い慣れていない人は認識できないので、昔からの生活習慣を考えて、1F以外には採用していません。

青森ヒバを使用した浴槽は縁がつかみやすく、滑りにくいのが特徴。肌触りが良くて保温性も高い。

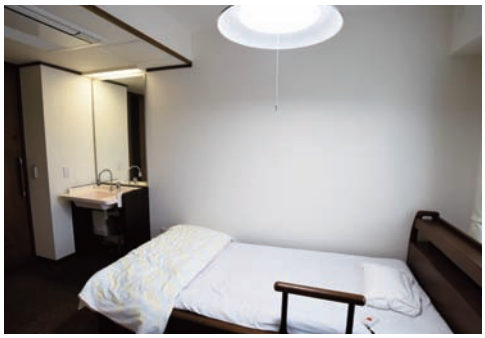
※ 5F 防災備蓄倉庫

建物構成図



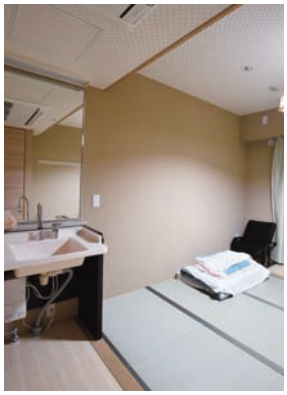
2〜4F 平面図
（カッコ内は3・4Fの室名）

ベビーチェアやおむつ交換台のある多機能トイレは、大便器の前方にも介助できる広めのスペースを確保。車いすでもアプローチしやすい。



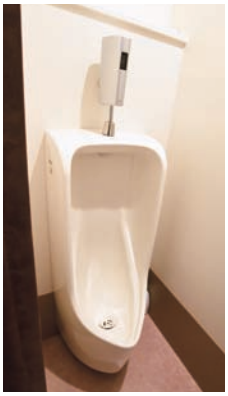
普通の家のように紐でスイッチ操作のできるペンダント式照明のある個室。ベッドや洗面カウンターは、使う人によって高さを変えられる。

お風呂の脱衣室側と廊下側の2つのアプローチがあり、通常は廊下から、入浴時には脱衣室から使えるトイレ。大便器の掃除口は便利に使われている。



和室がいいという人のために、ゆったり寛げる畳の個室も用意。

廊下に設けられた車イスでも使いやすい洗面カウンター。



小さなスペースも活用し、男性用の小便器を設けている。

Voice 施設長さんからの声

素材も含め五感での心地よさを大切にしています。

施設長
清水冬生さん

日本人は家では履物を脱いで、リラックスして過ごしていますよね。それが施設になると、靴を脱いだとしても内履きになる場所も多いです。ここでは自然に過ごしてもらうために素足での生活にして、素材も含めて五感で感じること、心地よいと感じてもらえることを大切にしています。また、さらに年齢を重ねても、その人に長く自立して生活してもらえるように、ソフトの面だけではなくハードの機能面からの工夫を考えました。

Voice 設計担当の方からの声

普通の家の感覚で、安心して過ごしてほしいです。

ケアスタディ株式会社
一級建築士事務所
代表取締役
間瀬樹省さん

今の自分の住まいはここだと思ってもらえる場所にするため、住まいの感覚に近づけるように、インテリアや設備は普通の家にあるものを採用の判断基準にしました。設計では、入所時には軽度の人が、後に重度になって車いすを使うようになっても生活できるように、デザインと機能を両立させたお風呂やトイレにしています。トイレは車いすでも体を回転させる角度が少なくて済む後方アプローチをメインに、サイドアプローチも採用しています。